

令和6年度第1回青森県立郷土館協議会について（会議概要）

令和6年度第1回青森県立郷土館協議会が開催されましたので、その内容をお知らせします。

1 日 時

令和6年7月24日（水） 13時30分～15時20分

2 場 所

青森県立郷土館 小ホール

3 案 件

- （1）令和5年度事業実施状況及び利用状況について
- （2）令和6年度事業実施計画について
- （3）博物館評価について

4 委員からの主な意見

- 利用者数について、休館中にも関わらず開館時の水準に達しつつあるのは、すごいことである。サテライト展として「今純三」を取り上げたことが素晴らしい。
- 県立郷土館YouTubeチャンネル「キョドチャンネル」には期待している。短い動画でもどんどん発信してほしい。
- 青森県立郷土館50周年記念サイトは良く作られているが、郷土館ホームページにリンクが貼られていない。郷土館で刊行している情報誌「青森県立郷土館だより」でも、そのサイトを宣伝しているが、誌面にはURLもQRコードも書いてない。『青森県立郷土館50周年記念サイト』と検索してやっとたどりつく。せっかく良い内容なので、せめてリンクを貼ってほしい。「キョドチャンネル」も内容が面白いが、ホームページの一面に「キョドチャンネルはこちら」と書いてあるだけで、そこで何が見られるのかなどの情報もない。まだまだアクセス数の伸びしろはある。
- 昨年、サテライト展「今純三」展で3万人という利用者数であったものが、令和6年度の缶詰展は、期間がほぼ同じ3か月にもかかわらず、その約10分の1しか入館者数を見込んでいない。来年のこの時期の協議会で、サテライト展が前年度比で9割減の観覧者数だったという評価が行われるのは、好ましいことなのか。
- 「出前授業」の評価を、参加者実績が目標値の半分以下だったことにより「未達成」としているが、規模の小さな学校等で実施したなどの特殊事情があるならば、それをしっかり書き込んで評価してはどうか。機械的に目標としている平均値に達しなかったから「未達成」という評価もいかがかと思う。

- 「出前授業」については、実施回数が同じであっても、児童数の減少により参加人数の目標達成が難しくなっている。実施したクラス数や学年数を目標とすれば別の評価ができる。
- 資料の登録点数を増やしていくという目標は、現場への負荷を重くする。登録点数を増やしていくのか、着実に登録作業を進めていくのか、現場への負担のかかり過ぎない、継続できるような目標としてほしい。
- 評価は数字では示しにくい部分もあるが、どのように目標を設定し、達成としていくのか、目標設定の方針を明確にしてほしい。令和6年度から令和10年度の中期計画を立てているので、毎年度の協議会で年度目標を説明する中で、方針を見せてほしい。
- 調査研究では、各分野が複数年の研究計画を立て、その中で年度ごとに評価を行っているが、そもそも、今研究していることについて、今年度末に成果を出すことは、できないのではないかと考えている。学問は数値目標が出しにくい。達成、未達成という評価は、調査研究になじむのか、達成という言い方が良いのか、という疑問がある。
- 体験事業について興味を持っている人は県内一円にいたので、青森市内だけでなく、地域を変えながら回数を増やして実施しても需要はあるのではないかと。職員は大変になると思うが、青森市周辺の人たちだけが郷土館を知っているのではなく、県内全域の子どもたちが知っているということが、将来への投資としても大事になると思うので、複数会場での開催を考えていただきたい。
- 事業を実施するにあたって、多少のお金を取るということも必要ではないか。イベントを行う際には、ターゲットに応じて無料にする、お金をとる、価値のあるものは高いお金をとってそれなりに興味のある人に来てもらう、といった区別をして企画するものだと思う。子どもを持つ親としては、無料はとても魅力的だが、無料であるために事業を続けられない、複数回開催できない、ということでは困ると思う。
- 無料は無料の価値でしかなく、そこに対価を払って得られるもの、ありがたみや、自分の中の価値、払った分だけあるという納得が得られる。
- 体験事業について、マンパワーが足りないことが課題であれば、私たちも協力するし、郷土館の出前授業やワークショップを受けた子どもたちに先生になってもらってもいいだろう。そうすることで、子どもたちには、やりがいも生まれるのではないかと。
- サテライト展「今純三」展への他県からの来場者から、絵葉書があったら良かった、という意見がアンケートにあった。観覧者は、展示を見て良かったら、何かしら形にして持って帰りたいものである。

- 子どもたちが「博物館」を知るのは、授業の調べ学習で博物館のホームページに掲載された資料を見る時が、一番の入口となる。郷土館が資料のデジタルアーカイブ化を進めて、それが子どもたちの目に触れるようになると、ポスターや企画展のお知らせなども、子どもたちの目に触れることになる。
- 前回の協議会で、私は、郷土館ではなく博物館という名称の方がいい、という発言をしたところ、委員のみなさんも同様の意見だった。この委員の声が具体的にどういう風に、例えば条例を改正するとか、具体的にはどう進展していくのかということを知りたい。
- 高校では探求活動「あおもり創造学」に取り組んでおり、例えば地域の廃校を巡って、写真を撮って一覧を作成するなどの活動を行っている生徒がいる。個別にこういう探究活動を行っている生徒と郷土館がタイアップするために、ホームページに「高校の探求活動を応援しています、窓口ここです」という、学校が何か悩んだ時や、必要な資料を探している際に、そこに連絡できれば分かるようなページがほしい。
- 協議会は、館長からの諮問があれば答申する役割を担う。名称変更に関しては、令和元年度からお願いしているが、協議会で毎年議論していることの積み重ねがないように感じている。新しくリニューアルした時が名称変更の最もいいタイミングだと思う。
- 郷土館ホームページにある資料データベースは、インターフェースが非常に難しい仕様となっていて、探しづらく、目的の資料になかなか行き当たらない。検索ワードの表記揺れを踏まえたデータベースを整備して、素人でも使えるようにしてほしい。これは閉館中でもできることなので、ぜひ検討してほしい。
- ミュージアムショップの準備は今からすべき。我が館の目玉はこれだ、と目星をつけているものを、どういったグッズにするのか考えていくには、これから開館までの時間では十分ではなく、むしろ短いのではないかと思うので、すぐにでも検討を始める必要がある。
- 中期計画期間である令和6年度から令和10年度の間、各専門分野において5年計画、6年計画で調査研究活動を行うのであれば、開館の時に合わせて、開館記念論集的な厚い紀要を発行すべきである。分野毎に弘前大学や東北大学の専門家を呼び、特集号を出す、ということでもいいのではないか。郷土館は社会教育でもあり学術機関でもあるので、休館期間中にしっかり研究した成果を発信することが重要である。
- YouTubeで発信している「キョドチャンネル」に、自分たちの売りの資料を載せ、それを蓄積していったらどうか。将来グッズとして売りたい物を、資料紹介として見せていくことで、商品化への反応を探ることができる。また、資料紹介の動画を制作

する際は、1個1個を別々にではなく、統一的なイメージで制作するなど、効率的な方法も御検討いただきたい。

- 弘前には漉き紙を作っていた文化があり、青森藍は紺屋町という名前が残っていて、文化として残っている。昔の文化に今の若い人たちが注目し、企業が商品化をして JAL のフットカバーにりんごのテクス紙を使うなどの例もある。郷土の新旧を見比べることで、その変化が理解を深める一助になることもあるので、そういった視点もあっていいのではないかな。
- 青森市森林博物館には旧青森営林局時代の膨大な資料がある。「博物館」ではあるが職員は指定管理している森林組合の職員であり、学芸員がいないので、資料の管理に不安がある。分類する技術のある職員もいないので、整理もされずに倉庫に保管されているのではないだろうか。明治から大正、昭和にかけて、本県は津軽森林鉄道や青森ヒバの生産により、ヒバ林業日本一になり、それらの資料が森林鉄道も含めて日本林業遺産になっている。林業遺産は全国で51か所あるが、そのうちの3か所が青森県にあり、森林鉄道は全国でも規模が一番大きい。そういった関連の文献が未整理のままと思われ、森林組合の職員は文献の整理には不慣れなので、郷土館が資料調査、整理などに連携して取組むことができないか。郷土館も忙しいと思うが、青森県の発展にヒバ林業は大きく貢献しているので、調査、整理などのサポートを検討していただきたい。